

ハレバレモンスターSTORY

第1章

第4話 宿題

ハレバレタウンにあるアカナツ学園。

みんなで宿題を片付けようと空き教室を使わせてもらえることになったリィ。

クラス委員で頼れるリーダーのヒタチ。

「あれっリィさん？」

『ヒタチくん！おはよー』

「また補習？」

『あっ今サラッとバカにしたでしょー、今からみんなで宿題するの！』

「あははっごめんごめん、リィさんが補習以外で学校に居るのが珍しくて」

『ヒタチくんは？朝練？』

「まあそんなところ」

『暑いのに大変だね』

「好きでやってるからね」

『すごっ、あっそうだ！練習のあと暇？暇なら一緒にしない？』

「ん～時間はあるけど・・・」

『じゃあ待ってるね！美術準備室借りてるから』

コンコンッ ガラッ

『あっ！ヒタチくん、来てくれると思ってたよー』

「有無を言わさなかつたくせによく言うよ」

「うっそ！委員長も手伝ってくれるの？百人力じゃん、アタシ応援係しよっかな」

「そんな係要らない」

「まあまあ、みんなでがんばろ」

『よーしっ、5人揃ったね、さっそく始めちゃおう』

「だったら得意科目で割り振ったほうがいいと思うんだ、国語はホミさん、算数はテツ、その間にハルネさんは感想文用の読書、俺とリィさんはお互いに美術のスケッチ。お昼からは交代して、教えあったりして夕方にはある程度終わるようにしよう」

「うげっ、アタシ本持ってきてない～っていうかそもそも家に本なんてない」

「図書室で短めの本借りるのはどうかな？私のオススメでよければ読みやすいのとかあるよ」

「それだ！ホーミンと一緒に行く！そのあとはテツくんを書いてもらう！」

「感想を言葉にさえしてくればね」

『じゃあそれで！ヒタチくん、スケッチ始めよっ』

『ヒタチくん、どんな感じ？』

「もう描き終わるけど・・・」

『どれどれ？』

「ちょっと・・・っ」

咄嗟に自分の描いていた絵を隠そうと身体が動く。

下手なことくらい自分でわかってる、見られたくない、恥ずかしい。

『これがヒタチくんからみた私かあ』

「・・・」

「めっちゃいい笑顔、ねえ！私ってこんなに笑ってる？」

勉強しているみんなに向けて彼女が呼びかけると、似てる、わかる～、美化しすぎじゃない、口々に感想が聞こえる。

「・・・下手じゃない？」

不思議な顔をして彼女は言う。

『絵ってさ、好みはあっても正解なんてないんだし、上手いも下手もないんじゃない？少なくとも私は好きだよ、ヒタチくんの絵。』

「そっか」

正解なんてない、、か。